

すいたの自然 2011

The nature of Suita 2011



	ページ
吹田市 全体調査	1. 吹田市の発展と自然のようす ……01
	2. 調査の目的と方法 ……02
	3. 吹田市の生き物紹介
	① 哺乳類 ……03
	② 鳥類 ……04
	③ 両生類・爬虫類 ……05
トピック	④ 昆虫類 ……06
	⑤ 植物 ……07
	⑥ 貴重な生き物たち ……09
区域別 調査	4. トピック
	① 竹林 ……11
	② コウモリ ……12
	5. 植生図 ……13
	6. 区域別のようす
	① 北千里区域 ……15
② 山田西区域 ……17	
③ 紫金山区域 ……19	
④ 弘済院区域 ……21	
⑤ 片山公園区域 ……23	
⑥ 千里丘区域 ……24	
まとめ	7. 生物多様性について ……25
	8. 今後に向けて ……26

1. 吹田市の発展と自然のようす

地形と地質

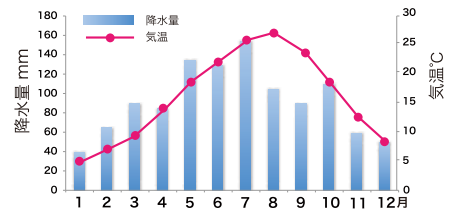
今から 6,000 年ほど前に、当時の淀川と猪名川が大阪湾に注ぐあたりで南に突き出た半島だったところが「千里丘陵」です。千里丘陵は、今の千里中央の近くにある島熊山（吹田市・箕面市・豊中市の境目）あたりが最高点で、ここから東南に向かってなだらかに下り、おおむ

ね JR 東海道本線のあたりで平野に変わります。このため、丘陵を流れる川は、西の方ではほぼ北から南に、東の方では北西から南東に流れています。丘陵は「洪積層」で「大阪層群」と呼ばれる分厚い地層の一部です。平野は「沖積層」と呼ばれる軟らかい粘土層でできています。

気象

吹田市は大阪平野の北部から千里丘陵にあり、内陸部に位置します。「瀬戸内海式気候」に属し乾燥気味ですが、大阪湾からの海風の影響を受け、比較的温暖な気候となっています。

吹田市の気温と降水量
2001~2010 年 (10 年間) の平均値

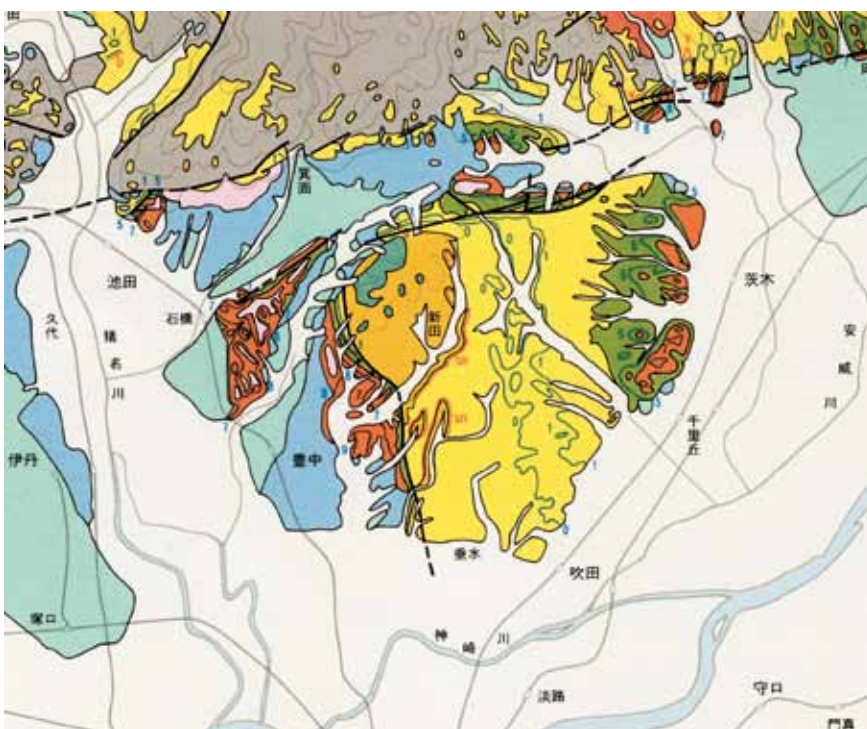


まちの発展と自然のようす

吹田は古くから開けた土地です。6 世紀ごろには須恵器などがたくさん作られ、その後も吉志部や七尾で多くの瓦が作られました。三島路（今の亀岡街道）や三国川（今の神崎川）が通って物資の集散地としても栄えました。戦国時代には吹田城が築かれましたが、その後は主に幕府領として稲・菜種・クワイ・タケノコなどが作られ、比較的最近まで農業が中心でした。丘陵には小さな村々が点在し、千里村（ちさとむら）と呼ばれたそうです。また、丘陵の端にはそれぞれの特徴から名付けられた岸部村、垂水村、豊津村などがありました。昭和 15

年（1940 年）以降、これらの村々がひとつになって、今の吹田市になりました。

昭和 45 年（1970 年）の万国博覧会と千里ニュータウン開発でようすが大きく変わり、千里丘陵の広い範囲が一気に市街地になりました。計画的に残された緑地と開発しにくい斜面地には林などが残っていますが、最近では千里の“リニューアル”と開発で、あちこちの斜面地がマンションなどになりました。現在、吹田市内で残っている自然は、生産緑地と社寺林などの他は、ほとんどが公園や保存緑地などに限られています。



吹田市付近の地質

- 凡例
- 低位段丘堆積層
 - 中位段丘堆積層
 - 大阪層群上部（上）
 - 大阪層群上部（下）
 - 大阪層群下部
 - 大阪層群最下部

原図
アーバンクボタ・MARCH
平成 3 年（1991 年）
株式会社クボタ

2. 調査の目的と方法

概要

この調査は、吹田市内の自然のようす（生物の種類や主な分布など）を調べて記録し、今後の環境保全などに役立てることを目的としたものです。

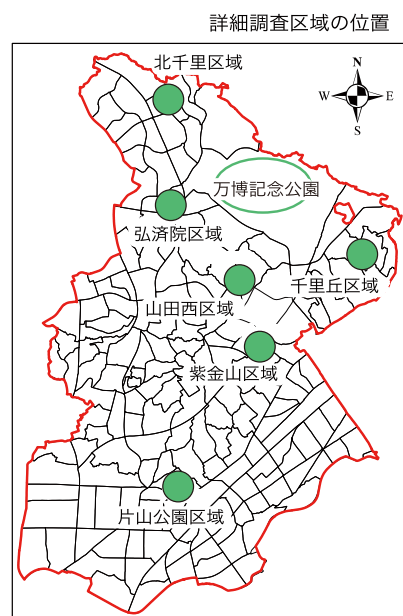
吹田市では、平成 14 年（2002 年）3 月に 2 年間の自然環境調査結果をまとめて、「すいたの自然 2001」を発行しました。

今回の調査では、多少の改良を加えつつも、当時の調査とほぼ同じ方法・場所で 10 年ぶりに実施しました。

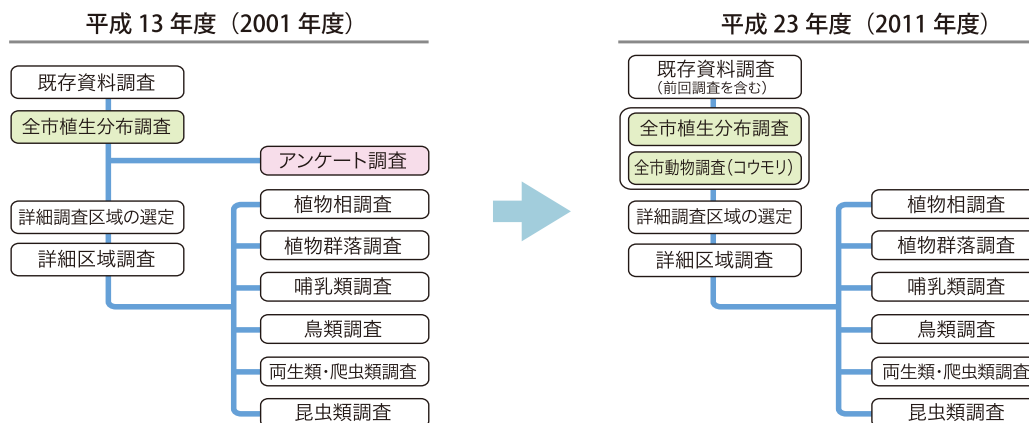
調査は、①吹田市全域の調査と、②特に選んだ市内 6 区域での調査とに分けて行い、それぞれ結果を整理しました。前回の市全域における調査では対象項目を植生と動物アンケートとしましたが、今回はアンケートは行わずコウモリの調査を行いました。コウモリが夕方などに飛んでいることは良く知られていますが、これまで調査されておらず実態が判っていなかったためです。また、前回の調査では、植生については結果を紙の地図上に色を塗る方法によって整理しましたが、今回の調査では前回と今回の植生調査結果を合わせてコンピュータデータとして入力し、パソコン画面上での表示や計算などができるようにしました。

これらの変更とともに、②では状況の変化に合わせて調査区域を少し変更しました。

今後、これらの結果は、本市環境部で構築している「環境情報データベース」に反映するとともに、総合的な環境政策の推進などに役立てる予定です。



調査の構成



調査のようす



自動カメラ設置のようす



FIT（昆虫トラップ）設置のようす



タケ・広葉樹混交林の調査風景

3. 吹田市の生き物紹介 ① 哺乳類

哺乳類の近況

平成 12 年～13 年（2000 年～2001 年）には市内を歩き回って哺乳類の足跡やフンなどを調べたり、ネズミのワナを仕掛けましたが、今回はワナは仕掛けず、自動撮影カメラを導入して動き回る姿の記録を行いました。その結果、吹田市内でノネコとノイヌも含めて哺乳類が 13 種類いることが判りました。特に万博記念公園にはキツネ、千里北公園及び紫金山公園にはタヌキ、弘済院にはタヌキとアライグマがいることが確認されました。また、イタチとアブラコウモリは、ほとんどどこにでも棲んでいるようです。こうして生き残っているケモノたちとは逆に、昔はあちこちに生息していたニホンリスは、今回はどこにも見つかりませんでした。また、前回確認できたカヤネズミは、今回かなり念入りに調べましたが、以前の文献記録が出てきただけで、実物を見つけることはできませんでした。イノシシは、10 年近く前に北千里の三面張り水路に迷い込んだ 1 例だけの記録がありました。

吹田市内は全域がほとんど町になっていて、こうしたケモノたちの棲むところは数えるほどしかありません。また車が頻繁に通る道路があって、うかうか渡ることもできませんし、あちこちに人やイヌがいます。さいわい野犬は少ないのですが、ノネコ（野良猫）があちこちの緑地や公園などを占領しています。さらに最近ではアライグマが侵入してきて、野生哺乳類のなわばりを奪いつつあります。リスの好きな松林などもほとんど無くなりました。

このような悪条件の中ですが、現在残されている緑地などを使って、まだ少しだけは生き残っているようです。

今後の街作りの中で、緑地などをうまくつないでいければ、生息する哺乳類などがだんだん増えていく可能性もあります。

（お願い）これらの動物たちを守るため、どこで見つけたかは詳しくはお知らせしていません。どうかご了承ください。



タヌキ（弘済院区域にて自動撮影）



イタチ（紫金山区域にて赤外線自動撮影）

いることがわかった哺乳類

（現地調査＋文献で確認されたもの）

目名	: 種名
モグラ目（食虫目）	: モグラ属の一種（コウベモグラ）
コウモリ目（翼手目）	: アブラコウモリ
ネズミ目（齧歯目）	: タイワンリス
	リス科の一種
	カヤネズミ
	ドブネズミ
ネコ目（食肉目）	: アライグマ
	タヌキ
	キツネ
	テン
	チョウセンイタチ
	イタチ属の一種
ウシ目（偶蹄目）	: イノシシ

計 5 目 8 科 13 種（同定が不確実な種を含む）

コラム

前回の調査時には、尺谷のあたりにキツネの家族がいて地域の人々が大切にしていました。間もなく開発が進んで、この群れはどこかに移動しました。写真のキツネは、2007 年 12 月～2008 年 1 月に万博記念公園内の日本庭園で自動撮影されたものです。また、2009 年には、職員アンケートでキツネを見たという答えが 2 件ありました。その後、茨木市内のゴルフ場でも見たという話があり、だんだんとそちらに引っ越ししたのかも知れませんが、千里北公園からも姿を消しました。



キツネ 万博記念公園

② 鳥類

種類数

市内では、現地調査では 81 種を確認、文献に載っていた鳥 164 種と合わせると、全部で 15 目 40 科 166 種でした。（この種数にはドバト、アヒル、アイガモを含みます。）

鳥と環境

調査区域を樹林などが多い千里丘陵上に設定したため、ツグミ類、ヒタキ類（キビタキ・オオルリ・サンコウチョウなど）、カラ類、キツキ類など、森や林の鳥がいろいろと見られました。また、農耕地や草地を好むケリがわずかにいましたが、ヒバリはいませんでした。なお、里山の林縁に多いホオジロがまったくいないのが特徴です。ため池などでは、カモ類、サギ類なども多く見られました。ごく稀に、オオタカ、ハイタカが林などの上を飛んだりしていました。

季節変化など

季節ごとに見ると、冬に種類が多く、夏や秋には種類数にして冬の 8 割くらいの鳥しか確認できませんでした。春から夏にかけては、ツバメの渡来のほか、アカハラ、オオヨシキリ、エゾムシクイ、オオルリといった渡り途中の鳥などが見られました。秋にはメボソムシクイやセンダイムシクイ、サメビタキといった渡り鳥が通過していました。秋から冬にかけては、カモ類（マガモ、コガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモなど）や、タカ類（ハイタカ、チョウゲンボウ）を初め、アオゲラ、アカゲラ、ルリビタキ、ジヨウビタキ、シロハラ、トラツグミなどが見られました。

いることがわかった鳥類

目名	: 種名
カイツブリ目	: カイツブリ
ペリカン目	: カワウ
コウノトリ目	: ミズゴイ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ
カモ目	: マガモ、アヒル*、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、アイガモ*、ホシハジロ、キンクロハジロ
タカ目	: トビ、オオタカ、ハイタカ、チョウゲンボウ
キジ目	: コジユケイ、キジ
ツル目	: バン
チドリ目	: ケリ、セグロカモメ
ハト目	: ドバト*、キジバト
ブッポウソウ目	: カワセミ
キツキ目	: アオゲラ、アカゲラ、コゲラ
スズメ目	: ツバメ、コシアカツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ピンズイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、モズ、カヤクグリ、コルリ、ルリビタキ、ジヨウビタキ、トラツグミ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、ソウシチョウ*、ヤブサメ、ウグイス、オオヨシキリ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、サメビタキ、コサメビタキ、サンコウチョウ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、シジユウカラ、メジロ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、シメ、ニューナイスズメ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス
計 12 目 32 科 81 種（現地調査分のみ） *もと飼い鳥	



コガモ



コサギ



アカゲラ



ヒヨドリ



モズ



アオジ



ツグミ

③ 両生類・爬虫類

概要

「両生類」や「爬虫類」は、もともと林や草地、水辺などが大好きです。もっぱら、春先から暖かくなっていく季節に卵を産み、どんどん餌を食べて大きく成長します。両生類も爬虫類も、哺乳類や鳥類などと比べると、長距離を素早く走ったり飛んだりすることができません。そんな習性と、畑などの減少、農薬の影響などが加わって、今ではめっきり少なくなっていました。

両生類

今回も、サンショウウオ類は見つかりませんでした。カエルの仲間は 6 種類（アマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヌマガエル、モリアオガエル、アカガエル）がいました。歌や絵本などで親しまれているトノサマガエルは、水田でほんのわずかが見つかりませんでした。

なお、モリアオガエルは誰かが持ち込んできたようです。万博記念公園にはモリアオガエルの他にニホンアカガエルも多数棲んでいます。

爬虫類

カメの仲間は 3 種類、トカゲの仲間も 3 種類見つかりました。ジムグリが今回は見つからず、ヘビが 2 種類に減りました。また、10 年前と同様に、おとなしいヒバカリ、毒のあるマムシとヤマカガシは今回も見られませんでした。ため池のある区域ではどこでも相変わらず外来種のアカミミガメが多く、アカミミガメ以外のカメは減りつつあるようです。トカゲ、カナヘビはほぼ全区域にいることがわかりました。

いることがわかった両生類・爬虫類

	科名	: 種名
(両生類)	無尾目アマガエル科:	ニホンアマガエル
	無尾目アカガエル科:	ニホンアカガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヌマガエル
	無尾目アオガエル科:	モリアオガエル
(爬虫類)	カメ目イシガメ科:	ニホンイシガメ、クサガメ
	カメ目ヌマガメ科:	ミシシippiaアカミミガメ
	有鱗目ヤモリ科:	ニホンヤモリ
	有鱗目トカゲ科:	ニホントカゲ
	有鱗目カナヘビ科:	ニホンカナヘビ
	有鱗目ナミヘビ科:	シマヘビ、アオダイショウ
	計 3 目 9 科 14 種	
	(同定が不確実な「アカガエル属の一種」はニホンアカガエルと見なしました。)	



クサガメ



カナヘビ



ヤモリ



シマヘビ

コラム

漫画でカエルの声というと、たいていケロケロとかゲロゲロ、ゲーゲーコなどと書きます。これは、主にトノサマガエルやアマガエルなどの声です。水田に近いところでは、田植え直後にはこれらのカエルの大合唱で夜眠れないこともあります。

トノサマガエルの体はややスマートな形で、背中模様もすっきりしています。背筋を伸ばして地面にきちんと座っている姿から、こう名付けられたようです。

そう考えるとトノサマに近縁のダルマガエルの姿は……。ちょっとアナタ、横を向かないで……。

ダルマガエルは絶滅危惧Ⅱ類



保護色のトノサマガエル

④ 昆虫類

概要

かなり自然が少なくなった吹田市内ですが、現地調査だけで 696 種、文献も入れると 14 目 211 科 1177 種の昆虫類がいることがわかりました。

種類

全体に甲虫の仲間が最も多く、次いでカメムシの仲間とチョウの仲間がたくさんいました。次のような種類が出現種の一列です。

目名	: 確認が多かった種
トンボ目	: シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、コシアキトンボ
バッタ目	: ニシキリギリス、ツチイナゴ
カメムシ目	: クマゼミ、アブラゼミ、ホシハラビロヘリカメムシ、マルカメムシ
チョウ目	: ベニシジミ、ホシミスジ、アオスジアゲハ、ナミアゲハ、キタキチョウ、モンシロチョウ
ハチ目	: コガタスズメバチ、ニホンミツバチ、セグロアシナガバチ

林の昆虫

マイマイカブリ、クロシデムシ、カブトムシ、ゴマダラカミキリといった大型～やや大型の甲虫をはじめ、ゾウムシ、ハムシ、カミキリムシ、クワガタムシなどの仲間がいました。林縁などでよく見るハヤシクロヤマアリや、日本でいちばんサイズの大きなクロオオアリも見つかりました。全体に、以前よりも大型の虫が少なくなっています。

田畑やため池・小川の昆虫

前回は比べて、ベニイトトンボ、ハラビロトンボ、コフキトンボ、アオイトトンボ、アキアカネなどが減少していました。逆に新たに出現したのは、マイコアカネ、コヤマトンボ、ハグロトンボの 3 種です。ギンヤンマ、シオカラトンボ、チョウトンボなどやオンブバッタなどはけっこう多く見られました。

草地の昆虫

色々な草が生えている公園などには、ベニシジミやモンシロチョウ、キタキチョウなどのチョウ類、ヒラタアブやニホンミツバチなどの仲間、カマキリ類などが生息しています。特に、千里北公園では、ショウリヨウバッタモドキ、ヤブキリ、マツムシ、カンタンといったあまり見かけなくなった昆虫類がまとめて観察されました。

植え込みなどの昆虫

ツマグロヒヨウモン（ビオラなどのスミレ類を食べる）、アオスジアゲハ（同クスノキ）、チャドクガ（サザンカなど）といった植込みの植物を「食草」とする昆虫類がいたほか、クマゼミ、アブラゼミなどが地面から出て飛び回ったり、繁茂してきたクズにクズハキリバチやクズタマムシ、マルカメムシが発生したりしていました。

外来の昆虫

ヒロバネカンタン、アオマツムシ、ヨコヅナサシガメ、ヒロヘリアオイラガ、モンシロチョウなどが有名な外来昆虫です。他にも、ラミーカミキリ、セイヨウミツバチなど合計 26 種類の外来種が見つかりました。



ヒラタクワガタ



モンキアゲハ



キンケハラナガツチバチ



ベニシジミ



ヒロヘリアオイラガ

⑤ 植物

吹田市全体にはどこにどんな植物があるのか、それらの植物がどのような状況かを調べました。

植生分布調査

■ 調査の方法

航空写真を使って、市内のどこにどんな林などがあるかを地図に書き写し、「植生図」を作りました。これを持って現地に出かけ、ひとつひとつ確かめて回りました。結果は、前回分の地図と一緒に、地理情報システム（GIS：Geographic Information System）というコンピュータ・システムに入力しました。今後、人口や土地利用など他のいろいろなデータと重ね合わせて使うことができます。（この報告では、13~14 ページに完成した植生図を載せています。）

■ 調査の結果

吹田市には、街路樹や人工的な公園などが多く、自然の林などはあまりありません。（両方を合わせて「みどり」と呼ぶことにします。）

市内最大の「みどり」は万博記念公園で、広い芝生やさまざまな林・草地・池などがあります。それ以外では、千里北、千里山田西公園～千里緑地、紫金山公園などに大きな竹林、樹林や草地などがあります。また、市内のあちこちに急な斜面や農地などがあり、やや小さな「みどり」が残っています。ため池には、岸付近等に少しだけヨシなどの水辺の植物が生えています。なお、阪急山田駅東側と千里丘では農地や林などが、JR吹田操車場跡地では広い草地が、それぞれ大きく減りました。

「千里の竹林」で有名な竹林は、豊中市に接する春日から桃山台にかけて広がっていて、高野台～山田～万博記念公園～山田丘にもやや小さな竹林が点々とあります。これらは開発などでじわじわと減ってきています。

これらの調査結果と大木調査結果（NPO 法人すいた市民環境会議提供）を重ね合わせてみると、それぞれ地形や町の成り立ちから来る地域の特徴がいくつか読み取れました。

前回の「みどり」の面積は 678 ㊦（緑被率 18.8%）でしたが、今回は 682 ㊦（緑被率 18.9%）で、少し増えました。竹林やコナラ林などが混交林（タケや落葉樹と常緑樹の混じった林）になったり、草地が減って庭園（植え込みなど）が増えており、町がきれいに整備される一方で、林などの手入れをしなくなっているようすがうかがえます。

※ 緑被率の調査方法などについては、25 ページを参照してください。



北千里の景観



フローラ調査のようす



千里の竹林



農村的環境の代表 ヒガンバナ

植物相調査

今回、吹田市内で記録された植物は 156 科 1089 種で、そのうち現地調査では 763 種でした。(前回は 127 科 657 種の植物が記録され、このうち現地調査では 610 種でした。)

分布をみると、北千里、山田西のように北にある大きな緑地では自然の林などに含まれる種が多く種類も豊かで、千里丘や片山公園などのように規模が小さく周囲を宅地などに囲まれた緑地では人工的な環境を好む植物が多く種類数も少ない傾向が見られました。また、貴重な植物であるギンラン、トキラン、ミズオオバコ、ヤマサギソウなどが見つかった一方で、増え過ぎやすい「特定外来生物」のオオカワフジシャ、オオキンケイギク、ナルトサワギクなどがかなりの数で見つかりました。



イノデ



ウツボグサ



モチツツジ

植物群落調査

植物が形作っている林や草むらなどをひとまとまりの“植物の社会”(群落)と見なして、市内 6 区域の中の 64 箇所を調査しました。

自然に近い林としてはアカマツ林、コナラ・アベマキ林などがあり、そこにはヒサカキ、モチツツジ、イノデなどの特徴的な植物が含まれていました。また、人工的なクスノキやハリエンジュなどが植えられた林や植え込みなどもたくさんありました。小さな空地などには、ヌルデやクズなどを含んだ“マント群落”(ツル植物などの群落)ができていました。

一方、草に目を向けると、人工的な造成地などには広々としたタチスズメノヒエ群落などの草地があり、狭いところには他の背の低いイネ科の草(低茎草本)やセイタカアワダチソウなどのやや背の高い草(高茎草本)による草地が多く見られました。



タチスズメノヒエ(低茎草本)群落



高茎草本群落

⑥ 貴重な生き物たち

今やほぼ全域が市街地であるこの吹田市内では、ほとんどの生き物が大切といってもいいかもしれません。しかし、それではどこかに重点を置いた保護対策をとることができませんので、ここでは環境省や大阪府などが指定しているものなど、一般に貴重とされている生物を中心に記載しました。

哺乳類

ニホンリスとカヤネズミは今回発見できませんでした。もし見つければどちらも吹田市内では貴重な動物です。どこかに生き残っていてほしいものです。全国的には田畑などに多いコウベモグラも、トンネルを掘れない舗装が増えたことなどで、めったに見られない動物になってしまいました。

タヌキ、キツネ、テンはいずれも田舎では普通の動物です。しかし、吹田市内ではたいへん珍しくなっています。

鳥類

現地調査で確認された貴重な鳥は、7目11科20種でした。そのうち、初めてこの調査で確認された貴重な鳥はミゾゴイです。また、サンコウチョウや、猛禽類のオオタカ、ハイタカ、チヨウゲンボウなどが確認されました。このような猛禽類がいたということは、吹田の自然にまだ良いところがあるということを示しています。なお、オオタカは、平成21年（2009年）から万博記念公園で繁殖していて、大切に保護されています。

また、カイツブリの減少傾向、ホオジロ、ヒバリ、キジなどの農耕地などの鳥が少ないが、わずかながらキジが北千里に生息していることなども注目すべきだと思われます。

両生類・爬虫類

両生類・爬虫類の貴重種は、モリアオガエル、ニホンイシガメ、アオダイショウでした。それ以外の両生類・爬虫類も、生息場所自体が少なくなっていることと、移動を妨げる道路などにより生息地が分断されていて遺伝的に交雑できないことや、農薬の影響を受けやすいことなどで、きわめて厳しい状況にあります。たとえば、水田地帯では数多く生息していたトノサマガエルも激減しています。まとまった水辺や緑があり車がほとんど通らない万博記念公園では、モリアオガエルが移入されたり、ニホンアカガエルが保護されながら生息しており、貴重種などの生き残りスペースとなっています。



カヤネズミ（吹田市外にて）
写真提供：畠 佐代子さん 全国カヤネズミ・ネットワーク代表



カワセミ（吹田市外）



トノサマガエル



アオダイショウ（幼蛇）

昆虫類

貴重な昆虫類としては14種で、現地調査で確認されたのは、ベニイトトンボ、コシロシタバ、ベニバハナカミキリ、キアシハナダカバチモドキの4種でした。このうち、コシロシタバは現地調査のみの確認です。また、貴重種に指定はされていないものの、湿地性とされるコバナササキリが確認されました。吹田市のような場所ではかなり重要と思われます。

文献調査では12種の貴重種が確認されていますが、そのうち10種が万博記念公園で確認されています。昆虫類にとっても、万博記念公園が貴重種の重要な生息場所です。

今回、昼間の現地調査だったので見つけることができずでしたが、市内に生息するヒメボタルは重要な存在です。山田西の千里第4緑地に特に多く生息しています。平成23年（2011年）4月11日に本市の「天然記念物」として指定しました。



ベニイトトンボ

植物

特に貴重な植物として、ヤマサギソウ、トキラン、ギンランがやや乾燥した草地に生育していました。一部の水田付近ではミズオオバコ、サヤヌカグサ、アシボソ、ヌメリグサ、コブナグサ、アゼナ、キクモ、チョウジタデ、コナギ、テンツキ、キカシグサ、オギノツメ、シロバナサクラタデ、ワレモコウ、ヒヨドリバナなどの湿生草本・水田雑草が残っていました。丘陵部では、リョウメンシダ、ホソバヤマヤブソテツ、トウゴクシダ、ゲジゲジシダ、コハシゴシダ、ウバミソウ（ミズ）、ワレモコウがありました。いわゆる貴重種ではありませんが、アカマツ林などに分布するコバノミツバツツジ、モチツツジ、ウスノキ、ナツハゼ、カンサイスノキ、シャヤンボなどのツツジ科低木類が一部に残っています。



ギンラン



ヒヨドリバナ



ミズオオバコ

5. トピック ① 竹林

概要

昭和45年（1970年）以前には、竹林をはじめ、アカマツ林、田畑、かや場などが千里丘陵一帯に広がっていましたが、万博やニュータウン開発などでそれらが大きく減少しました。現在は、吹田市内では往時の名残としての竹林が市域西部から北部にかけて点々と分布しています。

竹林は、タケノコ生産やその風景の美しさなどから、多くの人の関心を集め愛されてきました。「千里の竹林」は、平成元年（1989年）に府民投票により大阪みどりの百選のひとつに選ばれたのをきっかけに、全国的にも有名になりました。

植生区分の面積変化と緑被率の変化

表 1

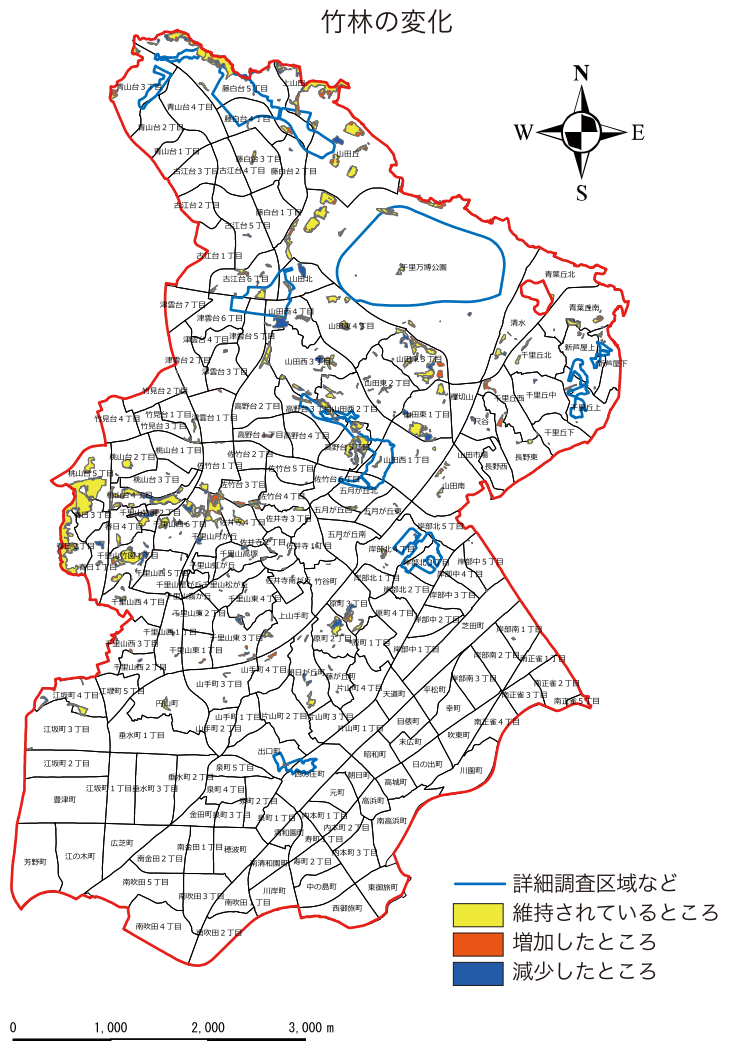
植生区分	面積 (ha)			緑被率 (%)		
	2001年	2010年	増減	2001年	2010年	増減
F1 竹林面積	84.3	31.1	- 53.1	2.3	0.9	- 1.4
F2 タケ・広葉樹混交林面積	3.3	28.0	+ 24.8	0.1	0.8	+ 0.7
F3 タケ・針葉樹混交林面積	0.1	27.5	+ 27.4	0.0	0.8	+ 0.8
F4 タケ・針葉広葉樹混交林面積	1.1	11.8	+ 10.7	0.0	0.3	+ 0.3
合計	88.7	98.5	+ 9.7	2.5	2.7	+ 0.3

竹林の変化

前回と今回調査時点とで竹林面積を比べてみたところ、この10年間で、管理されたきれいな竹林（表1のF1）は大きく減っていましたが、それ以外の竹林（表のF2+F3+F4）の面積は、逆に増えていることがわかりました。竹林内に他の樹木が生えてきたところが多く、逆にタケは一晩で数十センチも伸びるほど生長が早いので他の樹木を押しよけて竹林になったところ（地図の濃いオレンジがそれと推定）もあったようです。全体としては10haほど増えたことになります。



竹林のようす



② コウモリ

概要

平成23年（2011年）秋に数日をかけて、コウモリ類の生息分布調査を実施しました。調査員が夕方から夜にかけて自転車やバイクで移動し、空中にコウモリが見えたり、ここなら居そうだと思うところで、写真（右）のようなバットディテクターを使って声を確認しました。その結果、市内のほとんどどこにでもアブラコウモリが生息していることがわかりました。また、それ以外のコウモリ類は確認できませんでした。

声

バットディテクターで調べると、20KHzあたりと40～50KHzあたりにコウモリの声が確認され、他の周波数では聞くことができませんでした。このような高さでの声はほぼアブラコウモリだけのようです。コウモリは行動に合わせて声をかなり変化させていますので、ピピッとカジジジというような“鳴き方”だけで種類を区別するのは難しいようです。

分布場所

観察の結果、コウモリがたくさんいるかどうかは、食べ物（昆虫類）がたくさんあるかとか、水を飲む場所や巣を作ったりできる場所（危険無く出入りできる建物など）があるかなどで決まるようです。これらがそろっていると多数のコウモリが集まってきているように思われました。



行動等

観察できたコウモリはすべて飛びながら、空中を行ったり来たりして鳴き続けており、昆虫類を追い回しているコウモリもしばしば見かけました。また、水面付近でのコウモリは直線上の波紋を立てたり水滴を落としていたことから、飛びながら水を飲んでいましたようです。

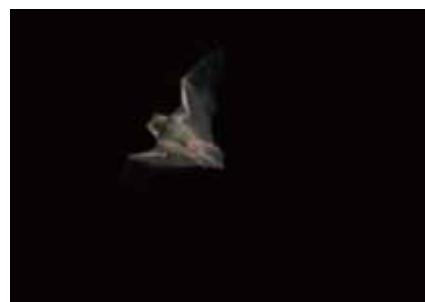
今後の課題

今回アブラコウモリの分布などはかなりつかめました。が、季節が変わるとどうなのか、アブラコウモリ以外はいないのかなどの判らないことがまだまだあります。

コウモリの声は人には聞こえにくい超音波なので、耳に聞こえる周波数に変える器械が、このバットディテクター（コウモリ探知機）です。

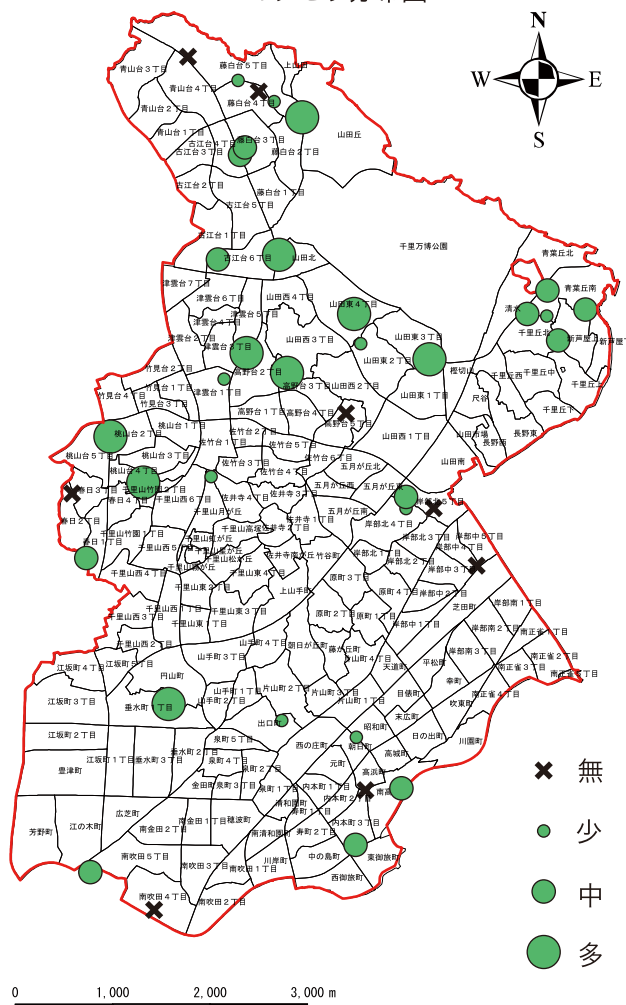


バットディテクター（コウモリ探知機）

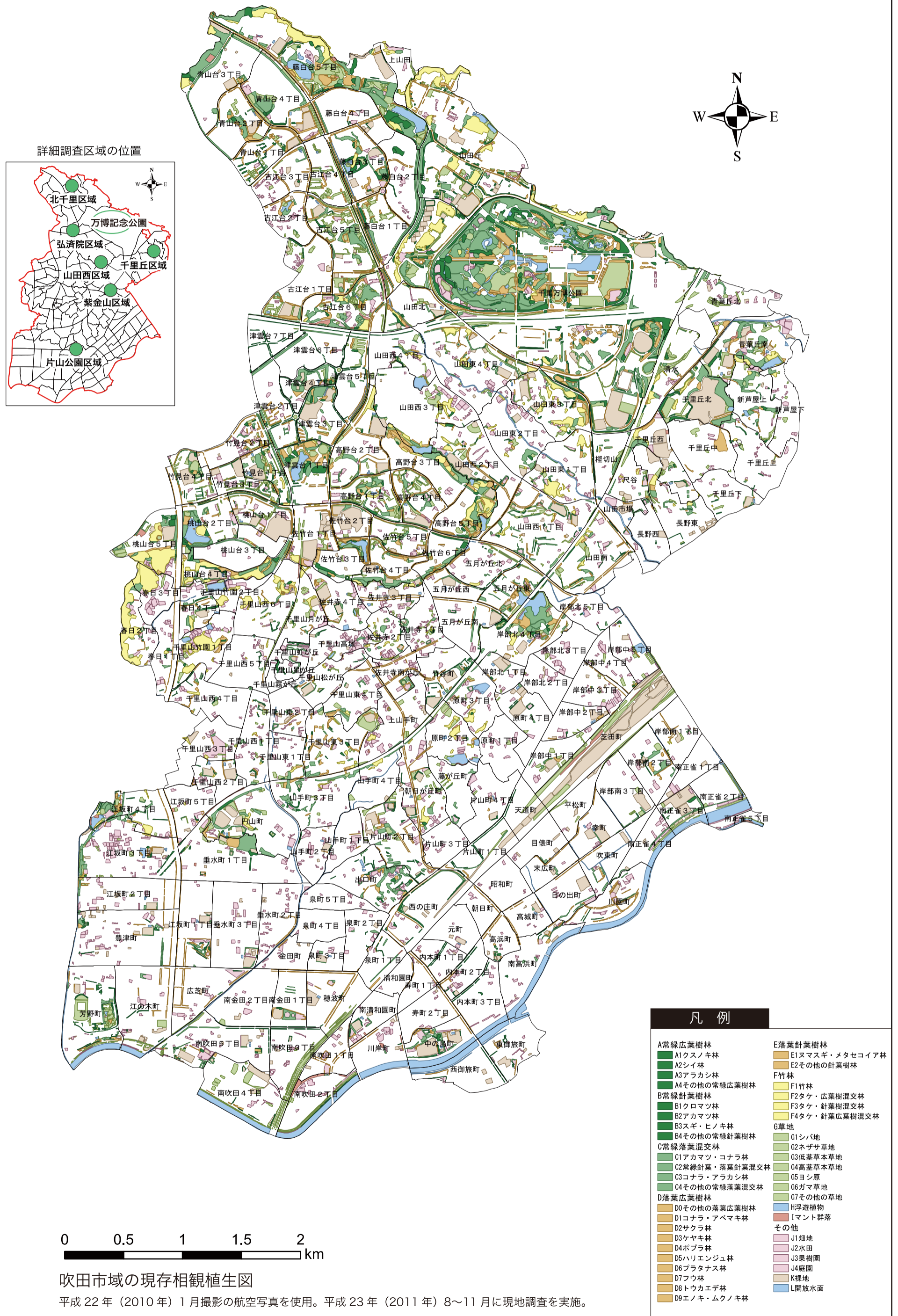


アブラコウモリ

コウモリ分布図



5. 植生図



6. 区域別のようす ① 北千里区域

概要

この区域は、3ブロックに分かれています。

①千里緑地(青山台～箕面市の境界緑地)

樹林が生長して暗い林のところと、里山林の残っているところがあります。全体に自然度が高いのが特徴です。

②千里北公園

他には見られないオギやススキの草原、広々とした広い芝生、体育館、野外活動施設などの他、ため池などもあります。昔からの竹林や林も多く、大勢の人がやってきました。

③苗圃

苗圃とは、公園などに植える花や木を育てる畑のことです。今は人の利用は少なく、木々がすっかり生長して、巨木がたくさんあります。市内で最も自然豊かで緑の濃い場所の1つです。市民ボランティアが入って手入れしています。

哺乳類

全4目 5科 6種(うち現地 3目 4科 5種)※
コウベモグラ、モグラ属の一種、アブラコウモリ、タヌキ、イタチ属の一種

鳥類

全13目 32科 68種(うち現地 11目 29科 61種)
水域の鳥：カイツブリ、カワウ、サギ類(ゴイサギ、ダイサギ、アオサギ)、カモ類(カルガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ)、バン、カワセミ、キセキレイなど
草地などに生息する鳥：キジ、チョウゲンボウ、コシアカツバメなど
樹林などに生息する鳥：オオタカ、コジユケイ、サンショウクイ、カヤクグリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、カケスなど



キンクロハジロ



千里北公園

凡例	
A常緑広葉樹林	E落葉針葉樹林
A1クスノキ林	E1ヌマスギ・メタセコイア林
A2シイ林	E2その他の針葉樹林
A3アラカシ林	F竹林
A4その他の常緑広葉樹林	F1竹林
B常緑針葉樹林	F2タケ・広葉樹混交林
B1クロマツ林	F3タケ・針葉樹混交林
B2アカマツ林	F4タケ・針葉広葉樹混交林
B3スギ・ヒノキ林	G草地
B4その他の常緑針葉樹林	G1シバ地
C常緑落葉混交林	G2ネザサ草地
C1アカマツ・コナラ林	G3低草草本草地
C2常緑針葉・落葉針葉混交林	G4高草草本草地
C3コナラ・アラカシ林	G5ヨシ原
C4その他の常緑落葉混交林	G6ガマ草地
D落葉広葉樹林	G7その他の草地
D0その他の落葉広葉樹林	H浮遊植物
D1コナラ・アベマキ林	Iマント群落
D2サクラ林	その他
D3ケヤキ林	J1畑地
D4ポプラ林	J2水田
D5ハリエンジュ林	J3果樹園
D6プラタナス林	J4庭園
D7フウ林	K裸地
D8トウカエデ林	L開放水面
D9エノキ・ムクノキ林	行政界
	調査範囲



コクワガタ



シマヘビ

(※全は現地調査と文献を含む。以下すべて同じ)

昆虫類



ウメエダシャク



ヒメウラナミジャノメ



モノサシトンボ

全 11 目 120 科 430 種 (うち現地 11 目 120 科 423 種)

マツムシ、カンタン、ショウリョウバッタモドキ、ヤブキリ、クロシデムシ、マイマイカブリ、カブトムシ、コヤマトンボ、ミズイロオナガシジミ、アカシジミ、コガネムシの仲間、ハヤシクロヤマアリなど



コナラ

植物相

全 124 科 564 種 (うち現地 123 科 540 種)
(以下、ブロック別にまとめました)

①青山台

箕面市域との境目を成す斜面地です。アカマツ林の名残やシイ類、カシ類の林などが主なものです。

シダ類：ワラビ、イノモトソウ、ナガバヤブソテツ、ベニシダ、マメヅタなど

園芸種：イチヨウ、クロマツなど

里山林：アカマツ、ヒノキ、ネズ、ハンノキ、イヌシデ、ムクノキ、ヤブニツケイ、ヤマコウバシ、カマツカ、イヌザクラ、ヤマザクラ、リンボク、カスミザクラ、ハゼノキ、ヤマハゼなど

②千里北公園

千里北公園の特徴はとにかく広いことです。いろいろな草の刈り方をしているため、さまざまなイネ科草本群落分布しています。全体に帰化植物が多く比較的新しい緑地の特徴を示していますが、一方でススキ群落、オギ群落など昔からの草本もみられます。(希少種)モクゲンジ、ギンランなど

シダ類：ゼンマイ、ウラジロ、ワラビ、オオカナワラビ、オオイタチシダ、オクマワラビ、ヤマイタチシダ、ヘビノネゴザ、シケシダ、マメヅタなど

草地等：ウマノアシガタ、ノアザミ、ハナビゼキシショウ、トダシバ、ノガリヤス、オギ、ススキなど

園芸種：ソテツ、イチヨウ、ヒマラヤスギ、クロマツ、コウヨウザン、メタセコイア、ラクウショウ、ヒノキ、カイノキ (別名カイまたは爛心木 (ランシンボク))、シナサワグルミなど

ボブラの仲間：カロリナボブラ、セイヨウハコヤナギ、ヤマナラシなど

里山林：アカマツ、ツブラジイ、ハネミイヌエンジュなど

外来野生種：シロバナマンテマ、ホソアオゲイトウなど

③苗圃 (水遠池北西～南側の一帯)

水遠池南側の緑地内の一部が水湿地となっており、水湿地周辺には、比較的シダの種類が多く見られます。

シダ類：フユノハナワラビ、ゼンマイ、ウラジロ、リョウメンシダ、ホソバヤマヤブソテツ、トウゴクシダ、ゲジゲジシダ、コハシゴシダなど

昔の農耕地や里山の名残：ウツバミソウ、ボタンヅル、ウツギ、ガクアジサイ、ノダケ、スノキ、ミズ、フレモコウ、ツリガネニンジン、ノアザミ、リュウノウギク、ハキダメギク、スズメノヒエなど

外来種：ホシアサガオ、タカサゴユリ、タクトアゼナ

湿地性：ミズユキノシタ、クグガヤツリ、ホソミンクガヤツリ、アゼガヤツリ、コアゼガヤツリなど

植物群落

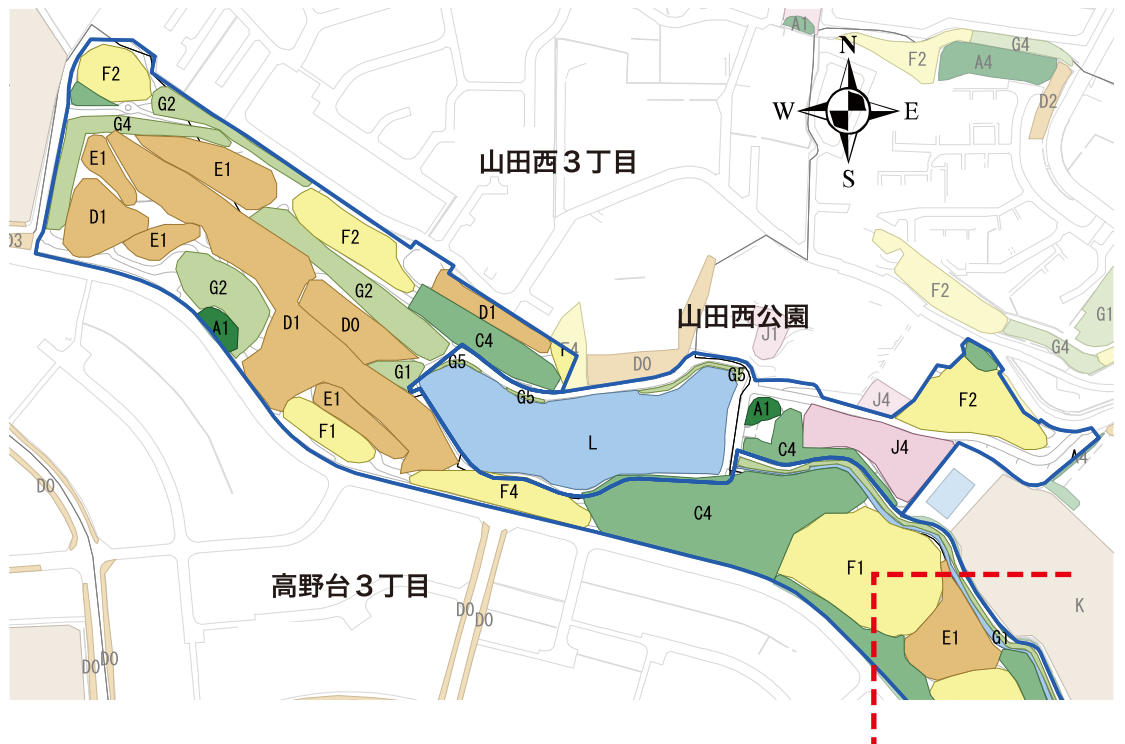
ここには市内でもっとも多様な植物群落があります。特に、アカマツ群落、ツブラジイ群落、広いススキ群落、オギ群落 (背丈・面積ともに市内最大規模) といった昔からと思われる群落が今も残っています。また、カゼクサ群落、タチスズメノヒエ群落、チガヤ群落、チカラシバ群落などの広大なイネ科草本群落の草原ができていても、他の区域には見られない特徴です。



② 山田西区域

概要

細長い緑地内に、大小のため池、水路、湿地、遊歩道、グラウンド、アベマキやコナラ等の雑木林、竹林、メタセコイア林等が分布しています。この区域は、吹田市内でも最も自然度が高い区域のひとつです。また、吹田市内でも多くヒメボタルが生息していることとそれが継続して調査されていることで、全国的にも知られています。



哺乳類

全3目4科4種(うち現地3目3科3種)
コウベモグラ、アブラコウモリ、イタチ属の一種

鳥類

高町池・名無し池・海老池と3つのため池があり、水辺の鳥であるカイツブリ、カワウ、サギ類、カモ類、カワセミなどが生息しています。また陸域の鳥が生息する樹林の質としては北千里区域と同じかそれ以上と考えられます。

全11目26科58種(うち現地11目26科58種)
カイツブリ、カワウ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、コガモ、ヒドリガモ、オオタカ、バン、カワセミ、アカゲラ、コルリ、トラツグミ、オオヨシキリ、オオルリ、キビタキ、センダイムシクイ、ニユウナイスズメなど



アオジ



コガモの雌雄

凡例

A常緑広葉樹林	E落葉針葉樹林
A1クスノキ林	E1ヌマシギ・メタセコイア林
A2シイ林	E2その他の針葉樹林
A3アラカシ林	F竹林
A4その他の常緑広葉樹林	F1竹林
B常緑針葉樹林	F2タケ・広葉樹混交林
B1クロマツ林	F3タケ・針葉樹混交林
B2アカマツ林	F4タケ・針葉広葉樹混交林
B3スギ・ヒノキ林	G草地
B4その他の常緑針葉樹林	G1シバ地
C常緑落葉混交林	G2ネザサ草地
C1アカマツ・コナラ林	G3低草本草地
C2常緑針葉・落葉針葉混交林	G4高草本草地
C3コナラ・アラカシ林	G5ヨシ原
C4その他の常緑落葉混交林	G6ガマ草地
D落葉広葉樹林	G7その他の草地
D0その他の落葉広葉樹林	H浮遊植物
D1コナラ・アベマキ林	Iマント群落
D2サクラ林	その他
D3ケヤキ林	J1畑地
D4ボブラ林	J2水田
D5ハリエンジュ林	J3果樹園
D6プラタナス林	J4庭園
D7フウ林	K裸地
D8トウカエデ林	L開放水面
D9エノキ・ムクノキ林	行政界
	調査範囲

両生類・爬虫類

大阪府レッドリストで「要注目」のニホンシガメが確認されたのは10年前の調査と同様、この山田西区域だけです。

全3目7科9種(うち現地3目7科9種)
ウシガエル、ヌマガエル、ニホンシガメ、クサガメ、ミシシッピアカミミガメ、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ



ウシガエル



ニホントカゲ

昆虫類

全 11目 109科 319種(うち現地 11目 106科 300種種)

ミズイロオナガシジミ、ベニイトトンボの他、アサヒナカワトンボ、ハグロトンボ、オニヤンマも確認され、この付近では自然度の高い環境があることを示しています。



ミズイロオナガシジミ

植物相

この区域にはかなり大きな谷戸環境が残っています。林内には昔の水田や農道の痕跡も残っています。また、レッドデータ種は確認されていませんが、全体としては吹田市内でも有数の多様な植物相を持っています。

全 108 科 392 種 (うち現地 106 科 384 種)

アカメヤナギ、ミゾソバ、ハンゲショウ、ヨシ、ヒメガマ、セリ、ヒシ、フユノハナワラビ、シロバナタンポポ、フサジュンサイなど



ラミーカミキリ

植物群落

この区域で目立つのはモウソウチク群落とアカメヤナギ群落です。この 10 年で竹林が減少し常緑落葉混交林 (コナラ・アラカシ林など) の面積が一番広くなりました。



ノアザミ



フユノハナワラビ



ミゾソバの群落の一部

③ 紫金山区域

概要

千里丘陵南東端に位置する都市公園で約7.2haの広さです。昔は片山公園や垂水神社付近同様に、すぐ下まで古河内湾が来ていたと考えられます。古来、吉志部神社の林及び吉志部瓦窯跡（国指定史跡）として保存されてきましたが、本市の公園になり、その後平成22年度（2010年度）までは市の事業で、その後も市民グループによるコバノミツバツツジ等の保全活動などが行われています。

哺乳類

全3目 5科 6種（うち現地 2目 3科 3種）
 アブラコウモリ、タヌキ、イタチ属の一種（チョウセンイタチ）

鳥類

公園に接して北側に釈迦ヶ池があり、ここに水域の鳥類であるカイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、バンなどが生息。全12目31科89種（うち現地11目25科44種）
 ゴイサギ、ハイタカ、バン、ケリ、カワセミ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、クロジなど



アオサギ



トノサマガエル



ニホンアマガエル



アマガエル

凡例

A常緑広葉樹林	E落葉針葉樹林
A1クスノキ林	E1ヌマスギ・メタセコイア林
A2シイ林	E2その他の針葉樹林
A3アラカシ林	F竹林
A4その他の常緑広葉樹林	F1竹林
B常緑針葉樹林	F2タケ・広葉樹混交林
B1クロマツ林	F3タケ・針葉樹混交林
B2アカマツ林	F4タケ・針葉広葉樹混交林
B3スギ・ヒノキ林	G草地
B4その他の常緑針葉樹林	G1シバ地
C常緑落葉混交林	G2ネザサ草地
C1アカマツ・コナラ林	G3低茎草本草地
C2常緑針葉・落葉針葉混交林	G4高茎草本草地
C3コナラ・アラカシ林	G5ヨシ原
C4その他の常緑落葉混交林	G6ガマ草地
D落葉広葉樹林	G7その他の草地
D0その他の落葉広葉樹林	H浮遊植物
D1コナラ・アベマキ林	Iマント群落
D2サクラ林	その他
D3ケヤキ林	J1畑地
D4ポプラ林	J2水田
D5ハリエンジュ林	J3果樹園
D6プラタナス林	J4庭園
D7フウ林	K裸地
D8トウカエデ林	L開放水面
D9エノキ・ムクノキ林	行政界
	調査範囲

両生類・爬虫類

全3目 6科 8種（うち現地 3目 6科 8種）
 ニホンアマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヌマガエル、クサガメ、ミシシippアカミミガメ、ニホンカナヘビ、シマヘビ

昆虫類

博物館横の密生地内で湿地性とされる貴重なコバネササキリが確認されました。

全 10 目 98 科 262 種 (うち現地 10 目 94 科 251 種)

アオモンイトトンボ、ギンヤンマ、ショウジョウトンボ、タマムシ、クビキリギス、ヤマトシジミ、ルリシジミ、ヒメジャノメ、コクワガタ、キベリヒラタガムシ、クロマルエンマコガネなど

植物相

周辺部の開発や公園の整備 (通称メダカの田んぼ消失、瓦公園などの開設、小路新池の整備、上池の整備、五月が丘側の整備の完了など) が進み、植物相が少し変化しました。

全 102 科 385 種 (うち現地 90 科 280 種)

アベマキ、コナラ、クスノキ、コバノミツバツツジ、ヤブコウジ、クロバイ、ゲンゲ、スズメノカタビラ、ナルトサワギクなど

植物群落

丘の南側にはコナラ群落、コナラ・アベマキ群落が、北側にはアカシヤやクスノキ、クロバイなどが一団となって群落を形成しています。また、南側農地にはゲンゲ群落、スギナ群落、スズメノカタビラ群落といった草本群落が分布して、都市公園としては珍しい農地の“のんびりした景観”を創り出しています。



コクワガタ



南側の農地



コバノミツバツツジ



ゲンゲ



ニジュウヤホシテントウ

④ 弘済院区域

概要

千里ニュータウン内の中国縦貫自動車道沿い(北側)にある南向き斜面に、高齢者福祉施設、病院、高齢者向け住宅などが並んでいます。リニューアルされて、新しい建物が増えました。広い範囲に草地や雑木林が残されていますが、建物敷地や竹林の拡大などによって、少し狭くなりました。すぐ東側に河川があり、区域の周囲には、野鳥ならちょっと飛ぶだけで行き来ができる程度の間隔で緑地帯や公園、万博記念公園などが分布しています。

哺乳類

アライグマとタヌキが、ほぼ同じ場所を利用して、どちらも家族群で暮らしています。

全2目4科4種(現地2目4科4種/文献なし)

アブラコウモリ、アライグマ、タヌキ、イタチ属の一種

鳥類

大きな水辺を含まないこともあって、カモ類が見られず、それ以外の留鳥が主です。万博記念公園西端にあるカラス類のねぐらに近いので、朝夕にはカラスがたくさん通過します。

全6目20科33種(現地6目20科33種/文献なし)

コサギ、キジバト、カワセミ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ウグイス、コサメビタキ、カケスなど

両生類・爬虫類

乾燥したところが多いので、そうした環境を好む種類だけが生息しています。

全1目4科4種(現地1目4科4種/文献なし)

ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、アオダイショウ

昆虫類

全10目93科290種(現地10目93科290種/文献なし)

ムスジイトトンボ、オオカマキリ、シロテンハナムグリ、コシロシタバ、カラスアゲハ、アカタテハ、キタキチヨウ、モンシロチヨウなど



イタチ



ニホントカゲ



ニホンカナヘビ



ヤブキリ



アリアケスミレ



シジュウカラ

植物相

全 94 科 340 種 (現地 94 科 340 種 / 文献なし)

モチツツジ、ヤマモモ、シラカシ、ゲッケイジュ、アリアケスミレ、ヒメスミレ、ナガミヒナゲシ、セイヨウカラシナ、セイヨウタンポポなど

植物群落

この区域は用途としては施設用地ですが、公園的な樹林、コナラを主体とする二次林 (いわゆる雑木林)、竹林、草地などの環境を含み、全体としてはかなり広い緑地面積があります。庭や花木～果樹園などの人の利用が多いところには植物の種類が多いのですが、植物種の少ない竹林の面積が広く、また全体として人手が入らないところを好むシダ類はあまり生えていませんでした。



クズのマント群落



区域に隣接する山田川の河辺林

凡 例

A常緑広葉樹林	E落葉針葉樹林
A1クスノキ林	E1ヌマスギ・メタセコイア林
A2シイ林	E2その他の針葉樹林
A3アラカシ林	F竹林
A4その他の常緑広葉樹林	F1竹林
B常緑針葉樹林	F2タケ・広葉樹混交林
B1クロマツ林	F3タケ・針葉樹混交林
B2アカマツ林	F4タケ・針葉広葉樹混交林
B3スギ・ヒノキ林	G草地
B4その他の常緑針葉樹林	G1シバ地
C常緑落葉混交林	G2ネザサ草地
C1アカマツ・コナラ林	G3低基草本草地
C2常緑針葉・落葉針葉混交林	G4高基草本草地
C3コナラ・アラカシ林	G5ヨシ原
C4その他の常緑落葉混交林	G6ガマ草地
D落葉広葉樹林	G7その他の草地
D0その他の落葉広葉樹林	H浮遊植物
D1コナラ・アベマキ林	Iマント群落
D2サクラ林	その他
D3ケヤキ林	J1畑地
D4ポプラ林	J2水田
D5ハリエンジュ林	J3果樹園
D6プラタナス林	J4庭園
D7フウ林	K裸地
D8トウカエデ林	L開放水面
D9エノキ・ムクノキ林	行政界
	調査範囲



⑤ 片山公園区域

概要

片山神社とアサヒビール工場、マンション群等に囲まれた市街地の約4haの公園です。南側の元海蝕崖と考えられている急斜面には樹林が残っていますが、他は人工的に整備された本市の公園となっています。吹田市立中央図書館などが隣接し、公園自体も人の利用が非常に多いところです。



キビタキ



キリギリス

哺乳類

全2目 3科 3種(うち現地 2目 2科 2種)
アブラコウモリ、チョウセンイタチ

鳥類

ほとんどは陸域の鳥類、それも都市鳥と呼ばれる一般的なものが大半です。春秋には渡りの中継地として小鳥が多く羽を休めています。

全6目 20科 32種(うち現地 6目 20科 32種)
ケリ、キビタキ、オオルリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、コサメビタキなど

両生類・爬虫類

多くは植えこみや庭園、斜面などに生息しています。
全2目 4科 4種(現地 2目 4科 4種/文献なし)
ウシガエル、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ

昆虫類

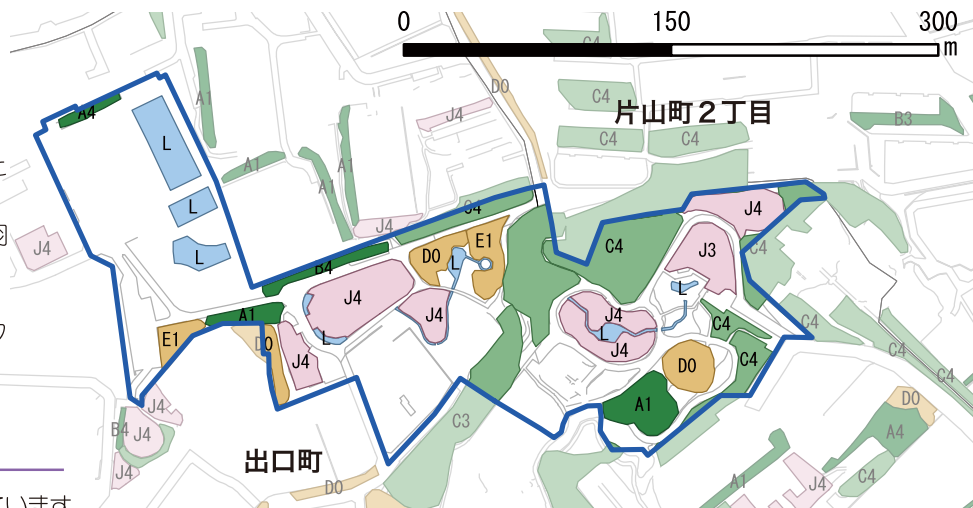
樹林やササ原の虫だけでなく、園芸植物を好む昆虫も生息しています。
全10目 59科 153種(うち現地 10目 59科 152種)
ヒグラシ、マイコアカネ、マルカメムシ、キリギリス、ヤマトシジミ、ツマグロヒョウモン、アオドウガネ、ナナホシテントウなど

植物相

全域が人工的に管理された公園緑地です。多種多様な樹木や花などが植えられています。
全 85 科 272 種 (うち現地 84 科 261 種)
アカマツ、クロマツ、スギ、ヒノキ、カイヅカイブキ、モリシマアカシア、アラカシ、シラカシ、エノキ、アキニレ、ソメイヨシノ、ネザサ、ススキ、カンサイタンポポ、ナギナタガヤ、コメツブツメクサ、イモカタバミ、アカカタバミなど

植物群落

公園木やハリエンジュ植林群落以外はイネ科群落、メヒシバ群落、シロツメクサ群落やネザサ群落といった低茎ないし高茎草本群落が多く見られました。



凡例

A常緑広葉樹林	E落葉針葉樹林
A1クスノキ林	E1ヌマスギ・メタセコイア林
A2シイ林	E2その他の針葉樹林
A3アラカシ林	F竹林
A4その他の常緑広葉樹林	F1竹林
B常緑針葉樹林	F2タケ・広葉樹混交林
B1クロマツ林	F3タケ・針葉樹混交林
B2アカマツ林	F4タケ・針葉広葉樹混交林
B3スギ・ヒノキ林	G草地
B4その他の常緑針葉樹林	G1シバ地
C常緑落葉混交林	G2ネザサ草地
C1アカマツ・コナラ林	G3低茎草本草地
C2常緑針葉・落葉針葉混交林	G4高茎草本草地
C3コナラ・アラカシ林	G5ヨシ原
C4その他の常緑落葉混交林	G6ガマ草地
D落葉広葉樹林	G7その他の草地
D0その他の落葉広葉樹林	H浮遊植物
D1コナラ・アベマキ林	Iマント群落
D2サクラ林	その他
D3ケヤキ林	J1畑地
D4ポプラ林	J2水田
D5ハリエンジュ林	J3果樹園
D6プラタナス林	J4庭園
D7フウ林	K裸地
D8トウカエデ林	L開放水面
D9エノキ・ムクノキ林	行政界
	調査範囲



ハナムグリ



オガタマノキ(花)

⑥ 千里丘区域

概要

毎日放送が転出して、区域の様子が大きく変わりました。以前は比較的小さな施設が緑豊かな環境の中にありましたが、それらは全て撤去され、大規模な造成が行われて、現在はほとんど道路と更地になっています。今後はマンション等の建設が進行するものと考えられます。今回の調査はそれに隣接する千里丘稲荷神社の自由に立ち入りできる部分と、近くの散策路及び芦屋東公園と三保ヶ池付近で行いました。

哺乳類

現地でアブラコウモリしか発見できなかったのは、開発で哺乳類の生息環境が悪化したことと、自動カメラが使えず姿を確認できなかったためと考えられます。全2目2科2種(うち現地1目1科1種)
アブラコウモリのみ

鳥類

ため池があるので、冬季にはカモ類の渡来があります。それ以外は工事中などのため主に町なかの鳥が中心です。全9目24科39種(うち現地7目21科33種)
コサギ、アオサギ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、コサメビタキ、シジウカラ、メジロ、スズメ、ハシブトガラスなど

両生類・爬虫類

減少が著しい種のひとつであるトノサマガエルの生息が確認されたことが注目されます。全3目8科10種(うち現地3目8科10種)
アマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ヌマガエル、クサガメ、ミシシッピアカミミガメ、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ

昆虫類

農地的な環境を好むキアゲハを確認できたのはこの区域だけです。全11目148科517種(うち現地9目65科138種)
ジュウジカメムシ、コバネイナゴ、ミズイロオナガシジミ、アジアイトトンボ、アオモンイトトンボなど

植物群落

以前広がっていた里山的な植生群落は大きく改変されて、かなりの部分が裸地化されました。残された林の一部は下生えを刈って公園になります。

植物相

新芦屋中央公園と千里丘稲荷神社にそれぞれコナラ・アベマキ林があり、アカマツ林やコナラ林の構成種が残っています。全94科340種(現地94科340種/文献なし)
ウスノキ、ナツハゼ、カンサイスノキ、シヤシヤンボ、サヤヌカグサ、アシボソ、ヌメリグサ、コブナグサ、アゼナ、チョウジタデ、コナギ、テンツキ、キカシグサ、シロバナサクラタデなど



三保ヶ池の景観



エナガ



ジュウジカメムシ



ヒメガマ

7. 生物多様性について

概要

生物多様性というコトバはよく聞きますが、どういう意味でしょうか。ある地域に、「いろいろな種類の生物がいること」だけではありません。「たくさん数がいる」だけでもありません。「いろいろな生物が多種多様いて、それらが適切なバランスを保って共存共栄している」という意味合いも含まれます。平成4年（1992年）生物の多様性に関する条約（略称：生物多様性条約）が締結されて以後、とくに有名になりました。

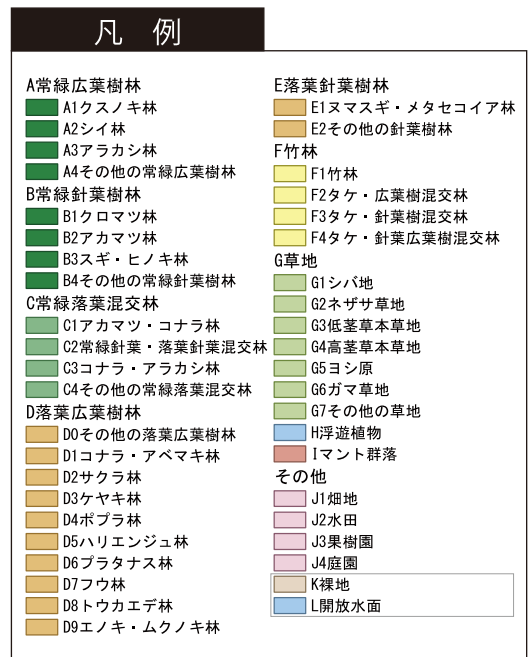
緑被率から見た生物多様性の変化

生物多様性について、吹田市内の植物分布から見てみましょう。

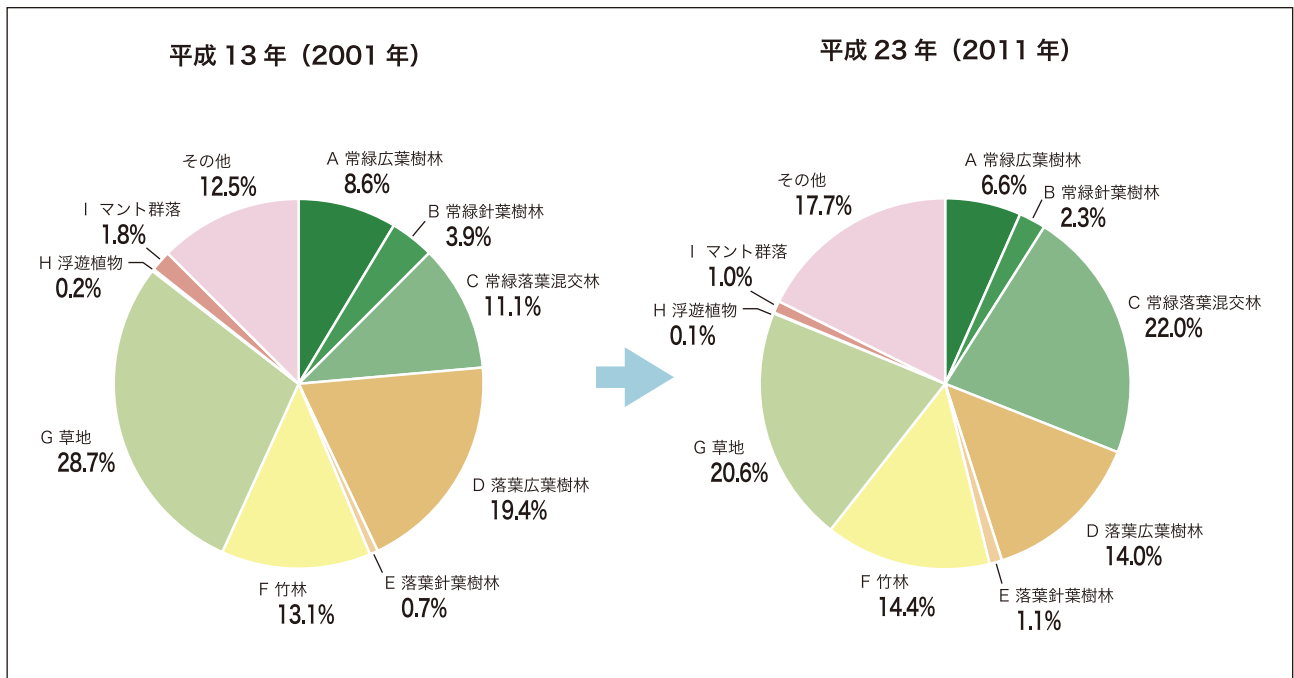
緑被率はこの10年間で、18.8%から18.9%に0.1%増加しました。植物の生えている土地の面積が増えたこととなります。でも、以前に比べてシイ林やアカマツ林、各種草地などいろいろな植物が生えている割合が減って、それ以外の“常緑落葉混交林”や“タケと樹木の混交林”などの「特定の林や草地」の面積が増えました。

植物が変わると昆虫や鳥やその他の動物も変わります。全体として、吹田市内の生物多様性は小さくなり、単純化してきていることとなります。

なお、緑被率は、13～14ページの現存相観植生図をもとに、凡例（右図）の「K裸地」と「L開放水面」を除いた面積をGISで計算し、それを合計して求めました。グラフ（下図）はその内訳です。



緑被面積の変化



8. 今後に向けて

市域全体の方向性

住宅などのさまざまな開発が進む中で、緑地が減少し、生き物の生息環境に大きな影響を与えることが心配されています。環境基本計画やみどりの基本計画に基づいて、地域の特性に合わせた施策を展開し、生き物の生息空間の確保やみどりと水辺に親しめる環境の整備を進めることが求められます。あわせて、学校教育や研修・講座などの場で自然への親しみを深めるための環境学習・環境教育を進めるとともに、市民・市民団体・事業者・行政によるネットワークづくりや協働による取組をいっそう進める必要があります。

生物保全の方向性

ミゾゴイ、イシガメ、トノサマガエル、ベニイトトンボ、ヤマサギソウなどの貴重な動植物については、種ごとに生息環境・歴史・環境変化への耐性などに違いがあります。生態系全体に目を配りつつ、生物多様性に配慮した総合的な施策や取組の推進が必要です。また、水田地帯を始めとした水辺や里山の保全に加え、千里丘陵における原風景の維持と回復など、人と自然とが共生する良好な環境の確保を図ることが求められます。

区域ごとの方向性

北千里区域：(青山台ブロック) 保護された里山林と小湿地を大切にしつつ、日当たりの維持やクズの除去などを進めることがポイントです。

(千里北公園ブロック) 小湿地・小池や草地の保全、鳴く虫とカヤネズミ生息地の保全回復、雑木林の保全回復などが必要です。

(苗圃ブロック) 貴重な植物の保護・保全の場として適切と思われます。

山田西区域：池や水の流れとそこに棲む生き物たち、竹林と雑木林の保全・回復が大切です。うまく行っているかどうかは、ヒメボタル、イトトンボ類、ミズイロオナガシジミなどが指標になります。

紫金山区域：コバノミツバツツジの増殖と雑木林の若返り、池と農地のビオトープが重要課題になると思われます。ツツジ科灌木類の種類数や、カブトムシなど甲虫類やオオムラサキの回復などが指標になります。

弘済院区域：高齢者施設や病院として、農地的な環境と風景を保ち増進することが効果的と思われます。果樹園の下でタヌキが遊ぶ姿を人々が眺められるような環境がイメージです。

片山公園区域：水生生物の生息空間を確保するための取組が必要です。また、緑豊かな公園でやっとたどりついた渡り鳥が休息できるように、樹木を豊かに保つとともに、猫の放置などを無くす必要があります。

千里丘区域：吹田ではもうほとんど例を見ない貴重な「池と谷戸のひとまとまり」があります。今の生態系を残し、それを維持するための取組を検討する必要があります。また、みどり自体も周囲とネットワークを保つ必要があります。

「すいたの自然 2011」

平成 24 年 (2012 年) 3 月

調査・編集

社団法人 大阪自然環境保全協会

〒530-0041 大阪市北区天神橋 1-9-13 ハイム天神橋 202

電話：06-6242-8720

FAX：06-6881-8103

E-mail：office@nature.or.jp

Home Page：http://www.nature.or.jp

発行

吹田市環境部地球環境室地球環境課

〒564-8550 吹田市泉町 1-3-40

電話：06-6384-1782

FAX：06-6368-9900

Home Page：http://city.suita.osaka.jp

この冊子は 500 部作成し、1 部あたりの単価は 266 円です

この冊子は再生紙を使用しています